

日本の近世女性のあり方に関する一考察

— 阿波国における「桜戸日記」を中心に —

湯麗¹⁾・劉潔²⁾・大橋 眞³⁾

¹⁾北京理工大学外国語学院・²⁾青島理工大学外国語学院・³⁾徳島大学大学院ソシオ・
アーツ・アンド・サイエンス研究部

Corresponding author: owhashi@gmail.com

An overview of women's life in the late modern period in Japan:
From the description of a diary "SAKURADO-NIKKI" in Awa district

¹⁾Lei Tang, ²⁾Jie Liu and ³⁾Makoto Owhashi

¹⁾Beijing Institute of Technology, ²⁾Qingdao University of Science & Technology, ³⁾The University of
Tokushima

Abstract

In the history of Japanese women's life, modern period has been considered as a dark age. This standpoint of view may be originated from the historical study of feudalism in Edo period. However, recent empirical studies have suggested another standpoint of view. In the present study, we analyzed descriptions in a woman's dairy "SAKURADO-NIKKI" by Misu Ueda in Awa domain in the late Edo era. The dairy is written using not only hiragana but also Kanji indicating high literacy of her. Her reading history of books suggests that she had an intellectuality of Confucianism. She was a teacher of a community school and a adviser of the community. She had a talent for the creator of haiku poetry, and many haiku poets were also described in the dairy. She communicated with many other haiku creator not only in the same district but also in other far districts of Japan consisting a intellectual network using mail system. Thus, some women contributed for the social system as the intellectual basis in the late modern period in Japan.

Key word: women's history, haiku, intellectual network, Edo period

1. はじめに

女性解放を目指した日本女性史研究は、戦前の高群逸枝、戦後の井上清の先駆的な研究を源流として、活発に研究が行われるようになり、家族、

労働、生活、教育、宗教などさまざまな面の研究が行われてきた。女性史研究は、今や歴史学研究の中の一分野として定着しており、女性の役割が、男性と同じく歴史の担い手としての地位が認め

られるようになった。

以前の日本女性史研究においては、近世は「暗黒時代」であり、近世の幕藩性社会の成立によって、厳格な身分制度や「家」制度があることから、女性はほぼ家の正式な代表者として見なされず、一貫して公的立場から排除されていたと考えられてきた。このような女性を軽視する姿勢は、当時の法制上でも顕著に見出され、教育の面においても、女訓書など女性用教訓書が流布するなどの事実からも窺える。このようにして、女性を「劣る性」として、「半人間」と見なす女性観は人々に絶え間なく植え付けられていったと思われる。そのために、日本の歴史において、近世は女性の地位が最も低い時代であるという見解があった（長野 2003）。

しかし、近年の実証的研究ではこのような通説的理解とはやや異なった考え方が出てきた。特に被支配階級である農村の女性については、武士階級とは、異なった社会の存在が明らかになってきた。「家」制度で強大な家父長権があったというのは武士階級の場合であり、農民の場合は女性も重要な働き手で、家庭内の地位は一概に低いとは言えず、むしろ妻の労働が重要で、夫を凌駕する現象さえ珍しくなかったとする見解である（宮下 2002）。さらに、高木侃は離縁状の研究を進めることによって、近世の離婚が専権離婚であったとする通説を否定して、協議離婚がおこなわれていたことを主張している（高木 1992）。

また、江戸時代は相当数の女性は読み書きができ、しかもかなりのレベルであったことは、近年女性史などの研究成果により、明らかになってきた。上層階級だけでなく、庶民の女の子達も教育を受けることもできた。最近、日記のような私的文書の史料価値が見直され、社会史や生活史の史料として利用されることが多くなってきた。今まで日本近世女性史研究においては、川合小梅（和歌山藩儒の妻、日記を残す）、大場美佐（世田谷代官夫人、日記を残す）、菊池民子（江戸日本橋佐野屋の主婦、日記、紀行文、歌集を残す）、沼野峯（和歌山の商家の娘、日記を残す）、西谷さく（河内の商家の娘、日記を残す）などの日記を分析することによって、当時の女性たちの日常生

活が明らかにされてきており、庶民の暮らしぶりが注目されるようになってきた。

本稿は、棚橋久美子が発見した上田美寿日記（棚橋 2001）を対象に、阿波国の上田美寿を例として、美寿が晩年のころ書いた「桜戸日記」を中心に、棚橋の先行研究を踏まえたうえで、さらに近世に生きる女性のあり方について考察する。

2. 上田美寿と桜戸日記

棚橋(2001)が紹介したように、上田美寿(1783～1857年)は阿波国美馬郡猪尻村(現在徳島県美馬市脇町字猪尻)とその西隣の脇町で生涯を送った。父も夫も徳島藩筆頭家老稲田氏の家臣であり、下級武士の妻である。桜を特に愛し、墓所には桜を植えてほしいといっているほどだが、これが号の残花、桜戸の由来と考えられる。

美寿は一生子供5人を出産した。長男の隆三郎は上田家当主であり、稲田家に家臣として仕えていた。日記が書かれた当時、40歳代後半であった。二男の直次郎は優れた剣の使い手であったが、天保10年6月27歳で没している。三男の嘉兵衛は大阪在住、商売を行っていたらしい。四男の半助は江戸在住。嘉永5年日本橋通四丁目呉服商塩野屋清三郎の養子となり娘りむと結婚。長女の久は、讃岐琴平村祇滋理の妻となったが、安政3年7月28歳の時急病で死亡している。

美寿は古希を迎えた年から日記を書き始めた。夫官兵衛は9年前に没し、息子隆三郎の家族と一緒に暮らしていた。当時美寿は寺子屋の師匠であり、30人あまりの子供を教えていた。美寿の日記は嘉永5年から安政3年までの5年間に書かれた5冊が残されている。その内容は毎日の美寿の行動を中心としながら、来客、到来物、来信などが記録されている。日記には嘉永6年ペリーが来航したことや、同年夏の干ばつの様子、安政2年の地震、伝聞したアイヌ民族の風俗・習慣なども記されており、美寿が社会への関心を持った人物であったことが伝わってくる。

日記の特徴は、折にふれて詠んだ俳諧や和歌を記している俳諧日記、歌日記となっていることである。体験・見聞・事物への感慨や感想、自分に贈られた俳諧や和歌、来信で知った俳諧なども書

かれている。彼女の書いた「桜戸日記」からは女性俳人の日々の暮らしや、俳諧を通しての友との交流の内容やその広がり、当時の人たちの芝居見物や旅や食事などの楽しみなどをうかがい知ることが出来る。

「桜戸日記」は、近世の女性日記として公刊されたほかの日記と違って、心の動きまで記されている。それは、近世末期の社会で女性俳人の生活ばかりでなく感情までも活写する希有の史料ともいえる。ここでは、「桜戸日記」から読み取れる多くの情報の中から、美寿のリテラシー、教養、家や地域社会における位置付けと彼女の持つネットワーク等を考察したい。

3. 日記から読み取ること

3.1 女性のリテラシー

一般には、近世女性の文字の教育は平仮名に留まるのが普通であり、女性が何かを書くときに、仮名を用いることが建前としてあったと思われるが、永井(2003)により、すでに多くの漢字が、女性にも浸透していることが明らかになっている。この「桜戸日記」では、本文は漢字交じりの仮名文で、多くの情報が記録されている。

まず、美寿個人の好みとして、普段の生活の中において、様々な読み書きをしていたことが判る。これにより、小さい頃から教育を受けたことが推察できよう。

A 書名不明な場合：

- ① 六日、礼者も大方に行来して巨燧に本読んで静かに暮し、廿七、八日（桜戸日記 一 嘉永五年 一月）

美寿の桜戸日記（現存している一、二、四、五巻計四冊、三巻は所在不明）をまとめたところ、日常生活で読書とはっきりと書かれていたのは150例あまりであった。

その中に、以上のように書名不明の場合もあるが、何を讀んだのを明確に書き残した場合もある。例を挙げれば、以下のようである。

B 書名明記の場合：

- ② 気能はれやまにて野も山も花の盛り、中屋敷よりもむかひのつかひ重りけれ共、何分足力つかず出ぎらひとなり、節句にハかならずと言やりて紫式部の日記を讀暮しはべる（「桜戸日記」五 安政三年二月廿七日）
- ③ 天気能（中略）、今子供が大勢イもんでくれし故、湖月抄讀さしを讀て聞しなバ少しハマぎれんと読けるに、少しハマきれ侍れど何分ほうくだゆくむねいたみ心細く、（後略）（「桜戸日記」二 嘉永六年五月十四日）
- ④ 気能本教へ居る内梅主来り、つれづれ草五冊恵ミくれ、本も絵入にてはんあぎやかに言ん方なき書物にて、嬉しく実には寿命延し、子供仕廻せければ、喰事も忘れ詠め入はべる、（後略）（「桜戸日記」二 十一月廿九日）
- ⑤ 賀寿合、竹取物語讀て居るに、きのふ津田の奥方へ文添て下助帯を送るとてざれこと津田と代悪しゝとて君にさゝくる下すけを其返事約しとしたゝめ、寄麗なるすゞ袋、娘が仕立しを進上と書給ひて（後略）（「桜戸日記」四 安政二年五月朔日）
- ⑥ 天気能、子供に本教へ、梅尽し書、五元集讀て暮し侍る（「桜戸日記」五 安政三年十月晦日）
- ⑦ 二日、三日、四日わ論語、武家盛衰記讀侍る（「桜戸日記」二 嘉永六年十月）
- ⑧ 天気晴やかにて唐詩撰絵入を讀（「桜戸日記」四 安政二年五月十一日）

C 儒教・道德関係：

美寿の讀んだ書物から、女性として儒教の影響を深く受けていたことが推察できる。有名な女訓書の一つ『女大学』を孫娘に習わせたり、子供たちに論語や孝経などの儒家經典を教えたりもしたようだ。また、女要手引草、女手引草などのような女性往来物を習得していた。

表1 「桜戸日記」に記された書物一覧

書物名	件数	内容
徒然草	16	随筆
湖月抄	15	物語注釈
紫式部日記	14	日記
在馬道の記	1	旅日記
竹取物語	7	物語
武家盛衰記	1	雑史
老の杖（怪談老の杖）	1	物語
女手草紙	1	不明
事京篇	5	不明
南卷の集	1	不明
秋津文（秋津島？）	3	俳諧
五元集	4	俳諧集
芭蕉句解	2	俳諧
古今集	1	和歌集
唐詩撰	2	漢詩集
唐詩五絶	1	漢詩集
孝教（経）	3	漢学
論語	2	漢学
女大学	2	往来物
女手引草	1	往来物
女要手引草（女用手引草）	2	往来物
桜尽くし又は梅尽くし	10	狂歌・俳諧
中臣大祓図絵	3	神道
読経	11	仏教関係

注：「桜戸日記」巻1、2、4、5（棚橋2001）により作成

- ⑨ 中日なれハ朝がれいして真次郎をつれ仏参、真福寺、東寺林、西明寺を参り、帰りに山下、井出、西条、緒方杯立寄、ゆるくして昼頃帰り、夫よりお栄に女大学書てくれぬ（「桜戸日記」二 嘉永六年八月廿一日）
- ⑩ 晴やかに朝顔も数々咲き、経読々見て、弘が須本へ御召にて出立と聞、海川安全守の地藏尊御影おし奉りて見立侍る、昼は女大学書て暮侍る（「桜戸日記」二 嘉永六年八月廿三日）
- ⑪ 内へ帰り子供に本教へ、ミしへ送りの本八冊、四十枚三十枚廿五枚、皆々書ねハならず、二冊にて九十枚程なる女要手引草と秋津ふみを書しに、寒さハ強く大よわり、右のかたハ落る如く気もつかれ半平臥、八ツ頃迄ハ教兼て、夫よりハ平臥、食事もすゝまず口、（「桜戸日記」五 安政三年十一月八日）
- ⑫ 曙ハはつきりとしなから、きりの如く雨ふりければ（中略）夫より女手引草四十枚の本を常に書て遣り、暮てハ真言三千辺にて休む（「桜戸日記」二 嘉永六年十月九日）
- ⑬ 天気能子供に本教へ、林のお高に本書てやり、計に孝教おしへ、四ツ頃となる（「桜戸日記」四 安政二年四月五日）

D 宗教・信仰：

一方、仏教からの影響もかなりあった。日記の中に読経が少なくなかった。例えば、

- ⑭ 晴れやかに早朝より観音経、寿命経読、事京篇書て子どもに教へ居る内、達世子来り、（後略）（「桜戸日記」二 嘉永六年 四月十八日）
- ⑮ 子供に本教へ、八ツ頃より元一郎来て賑々敷き咄して暮前帰る、真言五千辺くり（「桜戸日記」二 嘉永六年十月七日）
- ⑯ 九日、快晴、いつもの如く教へ間に間に中臣の本読、終日楽しかりつ、暮て今木先生来り何かと咄、川田に門弟多く出来し由、さへさへ敷人物也、茶菓のミにて咄しげり侍る（「桜戸日記」四 安政二年二月九日）

以上からわかるように、美寿は文字のある環境で彼女の生涯を送った。この日記が書かれたのは、すでに隠居生活に入ってからであるが、読書が日常生活の活動の大きな部分を占めていたと考えられる。読書の分野として、漢書の論語、孝経、唐詩選など、仏書では観音経、寿命経など、文学書では紫式部日記、湖月抄、徒然草、竹取物語、五元集などの古典作品や俳句集、教育書には女大学、女手引草など広範囲にわたっている。また、読書以外にも、琴を弾くなど芸術関係でも、高いリテラシーを持ち、教養が深かったと思われる。

さらに美寿は、普段の自分の読み書きの他に、地域社会の中で子供たちの師匠として、子供に教える活動をしていたことがわかった。例えば、

- ⑰ 六日、天気晴れやかに筆子供早朝より来り、読物教へ何かとせわしく・・・（「桜戸日記」二 嘉永六年五月六日）
- ⑱ 十日、真言構に行なんとて大万より誘ひに来りければ、むねいたミ不快故ことわり言てかへしけれども、寝る事もあつかましく、子供に本教へなどしてまぎらし、八ツ頃より本読て休ミ侍る、暮て緒方のぼゞくもしの茶沢山自身に持来り、予にハ外よりもらいしと菓子供くれる（「桜戸日記」二 嘉永六年十月十日）
- ⑲ 十七日、早く起、子供に本教へ、おかずに論語の一二をさらへさせ、お栄に唐詩教へ居る内、おりくが大学を書きてト頼む故・・・（「桜戸日記」二 嘉永六年五月六日）
- ⑳ 廿九日、静かに雨ふり子供に本教へ日記書（「桜戸日記」四 安政二年一月廿九日）
- ㉑ 廿三日、けふしハ晴れやかに子供に教へ居る・・・（「桜戸日記」六 安政四年四月廿三日）

3.2 女性の交際範囲

3.2.1 地域社会での交際

リテラシーのほかに、美寿の日記から彼女の交際範囲もある程度把握することができる。美寿は息子である隆三郎一家と同居しているが、実家三宅との行き来も頻繁で、体調を崩したあと「三宅へさへ廿日余りも得行ず行けるに」（三宅へさへ二十日あまり行けなくなった）との記述あがある

ほど親密であった。

②昼前頃 三宅へ行、にわかやら、そめき数々いと賑わしく、夜に入てハマかせ踊り更る迄有しが、下の町の組踊面白く、三宅より保一方に出きるとて、若嫁同道して友に見侍る、保一妻愛くるしく、茶よ菓子よともてなし侍る。
 (「桜戸日記」六 安政四年八月十六日)

日記一だけをまとめたところ、実家三宅との交際は以下の通りである。かなり頻繁で、嫁が結婚後も生家とのつながりを強く維持している証拠

とも言えるだろう。

さらに、美寿は世話をしたり相談を受けたりすることもあった。

③暮方繁野来りて、弟嘉兵衛せわ成しと山々礼言て、是もひら米持参、徳島家中の咄長し、五百石取瀧氏に勤居けること咄し、更て帰る、夜長く寝られぬ儘真言くり、手かだゆふなれハ、発句ねり、書ませなれど(後略) (「桜戸日記」一 嘉永五年九月廿五日)

表2 嘉永4年(1852)の日記に記された実家との交際

NO	月日	相手	日記内容
1	1.5	三宅	氏神参詣して、(中略) 参詣の帰りに三宅へ礼により、家内打揃ひ、盃、珍物の馳走に暮て帰る
2	2.25	三宅	廿五日、けふしハ、北ノ庄天満宮九百五十年にあたらせ給ふとて、男女打つれ参詣して、帰りに三宅へより、こんこんの馳走なり
3	3.4	三宅	三宅より只今来り給へと、子ともむかひに来り、行見れハ伊勢の太夫様にて、かの吉田氏、(後略)
4	7.10	三宅	(前略) 十日真福寺真言構に三宅の隠居同道して行、(後略)
5	8.5	三宅	葉月五日、三宅妙鏡大姉三廻忌て追善有しに、妙鏡大姉の霊前に会香して(後略)
6	9.26	三宅	菊月廿六日、讃州高松の達世子来り、(中略) ゆるゆる咄、一夜とまり、よく日三宅へも同道して馳走なり、須磨琴引て今やうたひともにたのしみ(後略)
7	10.11	三宅	前略、三宅より梅一來りて、御客様御同道にて只今御越と申来りし故、直に伴ひ行見れば、(後略)
8	12.14	三宅	はゞ山御隠居来り、宮脇公の御咄、朝がれいすミ三宅へ達世子道同して終日遊び、暮方むかひ来り予も一所二帰る
9	12.15	三宅	十五日より六七八九廿一二三とは、三宅にさびしくとて、逗留して仏参やら家内をまざらす事共咄し聞せなんどしてうつうつとくらしけるに、(後略)
10	12.26	三宅	前略、三宅梅一郎、徳島通町高木氏へ養子にもらわれける餞分に(後略)

注：桜戸日記巻1(棚橋 2001)に基づいて作成した

美寿が瀧氏の屋敷に武家奉公するための口利きをしたのか口利きをする人を紹介したのであろう。この美寿の力添えで、希望通りの武家奉公が実現したのであろう。繁野は弟が世話になった札に来たものと思われる。

このような世話や相談は、美寿が持つ情報やそれを元にした彼女の判断の的確さを頼ってのことであろう。ただ年齢を重ねているのではなく、年齢を重ねただけの情報網と情報分析力、確かな判断力をかわれて地域社会の人々から信頼を得ていたといえよう。

3.2.2 俳諧ネットワーク

「桜戸日記」に見られる友人との交流は、自吟の俳諧を認めた文や短冊のやり取りである。

- ㊸ (前略) 奥州須賀川たよ女へ如月中頃送る、白川や夢にもミたき初霞、歳旦、春興五句たにざく、風につれて小金の流、又しても送る乳母、風鈴を我友にして秋暮ぬ、また外に五枚、南方海部むら女へ、北南へたてハあれと花の友、歳旦、春興、なかめ来て梅柳迄ハ巨燵に (後略) (「桜戸日記」一 閏如朔日)

表3 嘉永4年(1852)の日記に記された俳諧人との交流

NO	月日	住所	相手	内容・目的
1	2.12	土州赤岡	其遊子、鶯仙様	発句交流
2	閏2.1	小松、松山、奥州、南方海部	玉鶴、吉原太夫、たよ、むら	発句交流
3	2.28	土州赤岡	不明	来訪
4	2.29	伊勢	吉田庄蔵(半紅)	発句交流
5	3.16	赤岡	其遊(多能)	来信
		土州	鶯仙	来信
		伊勢	半紅	発句交流
6	3.23	伊勢	半紅	発句交流
7	4.4	讃州	菅寿性(恵ミ子)	発句交流
8	7.18	鎌田	以方	発句交流
9	7.28	小松	長谷部(静佳園)	発句交流
10	8.15	金陵	楽王	発句交流
		上浦	近久美保女	発句交流
11	9.26	讃州高松	達世	来訪、発句交流
12	10.11	高松	達世	来訪
13	10.16	徳島	中野先生	来信
14	10.22	高松	達世	来訪、発句交流
15	10.22	讃州	菅寿性(恵ミ子)	来信
16	11.8	越後新潟	松木久右衛門	発句交流
17	11.10	与州小松	菊圃女	発句交流
		松山	日下先生、橋子、玉鶴	発句交流
18	12.25	讃州高松	達世	発句交流

注：桜戸日記巻1(棚橋2001)に基づいて作成した

このように、美寿の友人、知人は阿波国内ばかりでなく、広い範囲に点在している。北は越後新潟の松木まし女、奥州須賀川の市原たよ女、南は薩摩国種子島の栄左右衛門まで実に広い範囲の人たちと交流を持っていることがわかる。現在のように交通が便利でなかった当時の事情を考えると、交友範囲は極めて広いと言えよう。また、連絡を取り合っている人の中には、それぞれの地域の自治体史に取り上げられている人もおり、江戸時代末には遠い場所に住むそれぞれの地域で活躍する俳人同士連絡を取り合うような、俳諧を媒介としたネットワークが存在したことがわかる。遠方の友人については、生涯一度も会ったことがなく、文面のやりとりのみでの交友であった可能性も有り得る。そしてこれらの文面のやり取りの広がり、遠くの友人が俳号を持ち、自吟や面白い発句を教えあっていることから、俳諧の同人としてのつながりが、文面のやり取りを通じて、次第に広がっていったと推察される。このようにして、美寿は俳諧を通して交流する人が増えていったのであろう。

3.3 女性の行動範囲

江戸時代は農民や町人といった一般庶民までもが旅へと出ることができるようになった時代であった。生活上の必要のない人々までもが旅に出る時代になったわけである。徳川幕府による五街道の整備をはじめとして、各地での交通網の発達や道中の治安が確保されたことが、このような旅文化を生む背景にあったと考えられる。さらに安定した世の中で商品経済が発展することで旅に出る余裕が生れたこともその大きな理由の一つであろう。多くは病気治療のための湯治や心願ゆえの巡礼・社寺参詣といった理由で申し立てることによって、旅を許可されたようである。柴桂子はこの旅行ブームの中の女性に注目し、数年間、日本全国を歩いて近世の女性達が書き残した作品を探し求め、160点の女性の旅日記を収集することによって、庶民の女性にとって旅が、極めて「日常的」なこととして行われていたことを明らかにした。あらゆる階層の身分も様々な女性たちが、和歌・俳諧・漢詩・物語・小説・散文・日記・

歴史物語・教訓書・書簡など多方面に渡って多くの作品を残していることが明らかになった。女性たちは「舅・姑の為に衣を縫い、食を調え、夫に仕えて、衣を畳み、席を掃き、子を育て、汚れを洗い、常に家の内に居て、猥りに外へ出ずべからず」（福沢 1899）という風に教えられていたにもかかわらず、やはり旅をして、近世女性の旅の実態と女性たちの人生を垣間見ることが出来よう。

深井(1995)は、交通史の観点から近世女性のあり方に迫り、無手形旅行や街道沿いで女性・子供の生活などを分析し、後期になるほど女性の一人旅や女連れの旅が増加していくことを指摘している。江戸の女性の旅は、柴桂子の開拓した分野だが、美寿の日記から女の旅もよく記録され、ここにその例を紹介する。例えば

㊤北ノ庄天満宮祭礼、女子共廿人計りつれ参詣、ゆるくして七ツ下りかえり、よこに成本読々休ミ侍る（「桜戸日記」二 嘉永六年九月五日）

㊦弥生も末になり、廿日にハ白地のお縫来り、終日遊び、暮方にハ大師参り同道して行（「桜戸日記」一 嘉永五年三月廿日）

㊧廿二日、脇町両社夏祭にて参詣旁休ミ（「桜戸日記」五 安政三年六月廿二日）

もっと具体的記録があるが、時間と紙幅の都合上割愛する。彼女の旅を辿ってみれば、更に彼女の行動範囲が探れるだろう。

3.4 社会問題に関する関心

嘉永6年6月3日、ペリーが浦賀に入港し、同6月9日には久里浜に上陸した。戸田氏栄と井戸弘道に大統領の親書を手渡したのちに、同13日に帰還の途についている。そのわずか11日後に彼女の知るところとなり、「桜戸日記」には次のように期している。これは、彼女の社会問題に関する関心の高さの一面を現しているのではないだろうか。

㊨廿四日、・・・・寺島弘よりのせうそこ、北アメリカの八丈が島拝借之船。将軍様のご返事

にハ、八月にいなやの返事を致すとの御こたへにて、六万里有所へ帰りて来る間も有まじなれ共、得心して十三日皆々帰りし由・・・(「桜戸日記」ニ 嘉永六年六月廿四日)

- ㊸廿九日、大坂嘉平方せうそこ、ひらき見れハ家内無事、アメリカノ真書城内之御方写し取御目に懸申上候、外に唐方たゝかひの書付並ニヤバタイノ字ならべニ至し、・・・半助の文通を見れば家内無事ニ而、六月浦賀へアメリカ四艘入津、御手あての御大名様方御名面三十頭、一頭ニ五千人八千人つゝの人数ニ而かため候由、私共宅ハ日本橋通四丁目、江戸の真中ニ而、依之右御出陣の武具、馬具、陣屋之道具等迄毎日毎日車に積・・・(「桜戸日記」ニ 嘉永六年十月廿九日)

その他、同年に起こった干ばつに関する記載が頻繁に出てくる。

4. 終わりに

以上、日記を中心に近世女性の実像について考察してみた。これらの普段の生活の実相記録から美寿のリテラシーは、単に仮名文字に留まるだけでなく、「男文字」を十分に解読駆使できる相当のレベルを持っていたと言えよう。日記は、漢字交じりのかなで書かれており、『論語』、『孝経』などの漢学の教養をある程度習得している。このように、読み書きに関して、農村女性より高いレベルのリテラシーを持っていることがわかる。このような、高いレベルの教養を持ってからこそ、多くの女性と発句の交流を通じてネットワークを作ることが出来たのであろう。このようにして、地域社会の交流や、俳諧によるネットワークにおいても、高い知的レベルで活躍したことを窺い知ることができる。

そればかりでなく、交友関係とその範囲、家族・親族や地域社会の中での彼女の位置づけなど多くのことが明らかになった。美寿は、家の中では隠居という立場をわきまえた上で、家の行事に関しては年長者の役割を果たし、また合理的な精神の持ち主として、家族の精神的支柱の役割も果た

していたのである。このような美寿の日記の文面からも、自己実現を達成したという充実感を感じ取ることができる。もちろん、幕末期に美寿のような隠居女性は時間的・経済的余裕を持ち、様々な面で活動できたわけであり、彼女は希有の例ではない。美寿と文や短冊をやり取りする女性が日本の各地に居たことが確認できたように、美寿のような女性が各地にいたのである。彼女たちは、交流の意思があれば、各地の高名な女性俳人の情報を得ることが出来て、交流は可能であったのだ。

今回の研究により、暗黒時代と言われた日本近世に住んでいた女性の生き生きとした生活が、日記によって明らかになってきた。このように、日本近世における女性の実像は、通説のように必ずしも社会的地位が低いわけではないことがわかった。近代化の過程の中で、通説のように女性の低い社会的地位という見方が定着した背景を明らかにするためには、明治以降の近世の歴史観に関わる社会学的な背景の解明などを含め、時代をさかのぼって女性史の研究をさらに進める必要があるだろう。女性の歩んできた歴史、また、ライフサイクルをありのままに解明していくことが、これから女性史の発展に不可欠なことである。日本には、数多くの歴史資料が残されており、日本の女性の地位を実証的に解明出来る可能性がある。今後は、さらに多くの未解明の史料の研究により、近世に生きた女性の実像が追及される必要があるだろう。

参考文献

- 大口勇次郎 女性のいる近世 勁草書房
2000年7月
- 近世女性史研究会 江戸時代の女性たち
1992年6月第三刷 吉川弘文館
- 国書総目録(補訂版)第一巻一第八巻 1990年
岩波書店
- 国文学研究資料館 日本古典籍総合目録
<http://base1.nijl.ac.jp/~tkoten/about.html>
2011.3.3
- 定兼学 近世の生活文化史：地域の諸問題
清文堂出版株式会社 1999年
- 倉地克直 性と身体の近世史 東京大学出版
社 1998年

- 柴桂子 近世おんな旅日記 吉川弘文館 1997
- 渋川久子 女訓書と女子教育—近世女子教育へ
の一考察 お茶の水女子大学人文科学紀要
(14), 1961年3月 P159-185,
女性史総合研究会 日本女性史研究文献目録 I -
IV 東京大学出版会 (1983-2003)
- 菅野則子 近世女性のリテラシー 歴史評論
NO. 696 校倉書房 2008年
- 関民子 江戸後期の女性たち 亜紀書房 1980
年7月
- 総合女性史研究会 政治と女性 吉川弘文館
1997年11月
- 高木 侃 三くだり半と縁切寺 江戸の離婚を讀
みなおす 講談社 1992年
- 棚橋久美子 阿波国上田美寿日記 清文堂
2001年2月
- 棚橋久美子 草の根女性俳人とそのネットワー
ク 女性史学九号 女性史総合研究会
1999年
- 妻鹿淳子 近世の家族と女性 : 善事褒賞の研究
清文堂 2008年
- 永井悦子 近世における女性の漢字使用をめぐ
る一考察 早稲田大学大学院教育学研究科
紀要. 別冊 10-2 2003年
- 中野節子 考える女たち——仮名草子から「女大
学」 大空社 1997年
- 藪田貫 日本近世史の可能性 校倉書房
2005年7月
- 藪田貫, 柳谷慶子編. 身分のなかの女性 吉川
弘文館 2010年
- 永井悦子 近世における女性の漢字使用をめぐ
る一考察 早稲田大学大学院教育学研究科
紀要. 別冊 10-2 2003年
- 長野ひろ子 日本近世ジェンダー論 吉川弘文
館 2003年
- 福沢諭吉 女大学評論 1899年
- 宮下美智子 農村における家族と婚姻 「義江
明子編 日本家族史論集〈8〉婚姻と家族・
親族」 2002年
- 深井甚三 近世女性旅と街道交通 桂書房 1995
年